謝治寂琴人

へ 5
1859
3

俳諧寂栞巻之下

白雄坊選著　　拙堂増補

○[illegible]ひある句の事

其一　情の変

[illegible]人心

[illegible]

上の巻[illegible]

[illegible]

私情[illegible]

なき魂のみもいかに深かりき

是蜀帝魂といふよりの事にしてなる
事をいれともこれも一人の無情なる

杜鵑啼なりや古き硯 なき　公羽

是をおすゝめ余情とはなちを出して　なき
事つのしてみもされして一るの通情
餘情是ふかめて一理茶の事なるべし
補　其芭門すてころにしあるもののなくなく
ら事をはすくにおよふべし思ひ付く
ここにして生する絶るを観雑と有して
やも種をその味をしらべし

第二理屈の事

ふくめりに帆の煙よ柳哉

紫たのしく纏帋掛せり楼臺

補　かくあぜして詞のかゝるは皆理屈に
みちびるなり

やんとて新まいつの茶答　支考

男たのしくひとり秋夫てうとむかしの山　少よ

理屈をいつの世にもあるなれとも
理屈にみちびきぬる韻ありあり
まゝにして是非をなさる事し

第三たくみの事

咲花にかくるゝ背戸の柳かな

夕風に木の葉吹こむの江哉

皆みりさる題句なるハ見ゆるに
あらさるなし

擣鳴く木の葉吹こむ入江かな

かく案すれハ夕風に餘情あり
して断続のさひしき律に感後
かつ自然のなると来るのなると
似のなひるゝのなりけり

秋の雲尾上の松にかゝるなり　其角

智恩院のこゝえ桜を咲ぬ覧　信徳

こゝろにそむる自然の名まはしぞ
餘情をもとむへし

補 六義云雑とハ歌といへる古今抄云
ここにハ古よりの名高きにかゝる
定家卿曰雑に思ひなるをもとめし
かくよるへくあふくまくゝにしあへよ
餘情なき以ひとつまなり

枯芦の日くれておきて流さるゝ　蘭更

あさかほの蔓ちハさかしまなる　百明

あかり出せし秋の雲智恩院の二句の
餘情の誘ひにするも容易ならず後に
出せし枯芦蔓のなるも自然の題なり

さればとても此翁となるも口も吹かれ
ともに其角信徳ともに京の俳諧のはやり
句ふりは初心のいろはを以て云ひぬ
ことくをのべて其理を面白く云へる
みゆへなるへし

其時にその句出来たる由の文

蝶飛ぶやふはふはとしてくるる野中哉

このきば情にも有るへし

此花は木想も蹲す 菜 去留

芭蕉の花にも有るへし其まゝを
えがくの為に表へてるを亦尊とする
ゆゑに此者をよつて是をとらへ給ふる

てふの句にて

いろいろの事思ひ出す桜哉 翁

ある人曰此るものは情きこえぬ句なし
源氏物語に須磨の巻にはなく
はなさくさかる頃とて花の下のさくら
木の下に咲きみだれたる花のうららか
なるもよろしくの下にありし出る事を
うちかさねつゝとみおこうちもとゝ
相ありのる俳諧の上手故其の古
ふるきの吟をゆるにつらぬ其花の
真精りのなすことはされさまれ
形を編るみなのへうるる

此時の句

きりぎしの木下をはらふ秋風　翁

世にさを小鳥よまるぬ立月あ　尚白

夕ちゝ捨の白い初ちきり刈　及扇

ぬの見ぬ木陰ふるる秋の雨　尚白

あを世と時ふるるあの緒の色　其角

時雨乃月

清ふのよりうる生ふる夜の月　許六

浦舟乃登る釣を徒　月　古根

馬こえてあゝ山ふるの夜の月　懐雪

夕の月ふるゝ門をたゝきぎす　野坡

ふる人を出ふく待ふ月の出ます哉　牛残

名月や池をめぐりてよもすがら　翁

十六夜ふるを園のはるる　〃

鞠の出ふゝ月のあるこゝ　一伴

あゝ猫のかけ出ふ彩やみの月　丈草

四時の風

ちる桜や雲の中行ミちの声　木導

春雨やすまふ時や菊の色　嵐雪

小原女やかみなよむよかく人常　園女

あさしみなや蛇の衣ふく秋の風　野青

くだかれし二日の月の吹ちる哉　荷兮

かくはなれの姿よき句のなるべし風吹のぬ情をのせ(?)して あふさる時を春秋にはきてものをまきかくてこそあれし

補

初心の人題を得て先題のおもむきを

はなひろくおもふ経並古格の法なるそれも何よりへしたしく心得る題にて も何にもよい文治にもちもかくも作には 其のかたるならへさる題を初編 出ぬへし君子の下問を恥ずとも 己より先達の人にあふもよみ其の業 の人にふ下姿の其の句もちかくをまれ るにくいかふまするも何かへしつくり おつてすこしも恥辱のくれ恥て問 さる其才涯の損とまなへし去て かくえ出る題を深く記念して 題号をかしむ身は也ふかく丁寧 をはらふして出ふさるもの其の句 出さるも事あるへからす題の題を よく心えさる有縁の題に得かく てまもいつたからむ

云名抄云僕あふ此はもの初心の

頃のことなり安永のとしの春
かゝるものなりとて見初丁寧
及後はあるべきものをそなへてかくもとり
あるべきなり
仲六日舞るい歌の曲輪を能生て
人し曲輪の内をたるべきものの
絵をし自然にくるるの内をあるい夫然
なるのふしてを春形をしく内をあるべきる
みしてを等類をるなを多く学しを
時を等類をるなを多く学しを
功をあるしかをあるすべきい自然
みるくを得のしるもを見るこを安よりの
なれを初のをりかを絵しをを
よくみのいあるるのなり
絵は少しをのるをのるを
安ふをををのるをのるをのるを
ををを自然をなるふをのなるを

其五当番かを合を未詳のる
功をや野ふ美をのの西あを
をを抑もはをてぬるるる水の色
のをを当番ををのををををををかく
みのをを当番ををのををををををん
ほをきを時をや五人のあやをを　翁
すしを行のを酢の香ひい　湖風
補 稲はのやをを静の秋の人　伯先
ををををまを詳のををを

補

[illegible]も生のよりき世の[illegible]る　翁

[illegible]やとき[illegible]の枯尾花　烏明

[illegible]ふ他の[illegible]をあそせるし

其六　古筆　[illegible]

[illegible]やこれも[illegible]て[illegible]より

清女枕そのかの[illegible]と舟の[illegible]

[illegible]もとあ[illegible]はあ[illegible]の

[illegible]

ぬ句法おるよ[illegible]

[illegible]の[illegible]を[illegible]

[illegible]さ[illegible]の[illegible]の川[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

補

草[illegible]や[illegible]人[illegible]

[illegible]や[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

後の月ハ康長に撫卿とて山紙々にて
とりに徒より月詣しけるに名月のよ
書きと月詣しけるにむかしく日
夕餉有し

常にしらぬは月のかゝし　暁臺

名月の蝿もの時ハそてはらし　古嬌

以ふ津乃や思ひ入あたね山もなし　可都里

こゝろ得てしるへし

其七　題の文字にする未練のこと

手枕らしき関を越る如き

鶏頭や侍るの鶏頭に根ぞ

かく表にせるところに仮令ありて
みるとさへつき自然の題に一るの
中の幸ひとはしるに結ふ出し
きられぬハめしきを

きよろくと根露もしや女郎志　翁

枯の茎の葉ハそのむしや鶏頭花　万平

こゝろを得へし

補　題ハよくよく文字にせる事

角抜や須磨に春の牛の牟

こゝを角とらふまよりも牛の字へうるゝ

菊よりひのもとに咲せよ天龍

高よりあけよてゝ紙とろゝとゝ

夕雲花ちこ落ぬや鶯よ山

落るとゝいふより鶯とかゝこそちるゝ

花ゆるかゝて西ゆゝ月ゆゝの涼

分入ゝ川上ゝし花みゝる　重厚

人ゝ〳〵火とり上を接ちる　白雄

ちゝゝおよゝるの初ゝを眠ふゝ　樗良

夕ゝゝ門ゝゝ秋とゝふゝ　嘯山

柿寺や藪の中ゝ鳴ゝ音　士朗

文ゝゝかゝるゝゝゝ風雨形

ちゝちゝの色ゝ味の色ゝ

其八作よすゝむ事

寺柳や水ゝうゝ人の浮ちゝ

ゝゝち雲の耳をとゝ出ゝ蛙ゆゝ

こゝゝふゝ作よのゝつゝちゝのゝく作を

修修よゝゝゝや古人曰作よゝゝむ

ゝのゝゝ一作ふ刈一るのちゝゝる

[illegible]と一位のるおよあ[illegible]

其九　二位[illegible]なる事

ぬきさかりの菊の細やかの雑る

さらよ又酒さの珠や月今宵

ぬきさかりの月　声の和

月を珠と[illegible]又酒さ[illegible]

須よのと[illegible]

[illegible]や

其十　見立白の事

曲[illegible]も[illegible]も[illegible]細[illegible]

紅葉叢も[illegible]屏風立[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

補

月や柄をさ[illegible]

藻の[illegible]人の[illegible]　宗鑑

[illegible]　胡及

[illegible]

さ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月ゝ柄をさしてうちてとえまてゝ

宗[illegible]

其十一　[illegible]なるさ旬の夏

[illegible]や中ふしてゐる　十六日

[illegible]

[illegible]

中[illegible]て降る[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二月二日なの[illegible]

[illegible]

補　或曰閏[illegible]

初[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十五日　[illegible]　去来

[illegible]　之道

ことばをよく味ひ読して其旨を得て
此ゐるぶんあるべし

其十二　句のうらの事

此のさかのゑれぬ兄えぬ誹諧には
其細は離れて其境に侍の旅に誹には
ちかきはし以外しひくるのさかゆる

「我見に出まいもしと滴き時も
人さ知義おそく出くも

此ところさしいかしなかりて風雅は
そうのはしをそうぶべきを

山はくらき世をもつれた誹諧哉　猿雖

誹の秋以ても きくや寺の音　横几

古人曰発句は云ひ出してよまさなき事
まてる短冊にまてるめんてみのよ
句としてなかにまへ細翁曰句くら
人ちうかはくへしとはしとそ道

補

涙に懐手なき瓦のはしく花　佛仙

冬のこれ草もめるはあま雲の峰　蓼太

はこれのかくてくるゝ月日の秋　蕪村

たるのうやあてはふ生てもはもふ　見風

鶴ゆてて人よアんてる秋の蕾　白雄

ちてきてくの白のくゝ紙ん白多くゝ

陣ゝ蕾ぬ蕾ゝ蕾ゝと梅雨哉

あちすゝ哉白ゆなの

たゝちちや犬よ形るゝも蕾ちゝ門

見ゆちゝゝ半人のおゝとゝ中ゝ

るちゝゝいてくゝあを由ゝ

露沾産みて

四行の蕾もあらむ年の庭　翁

たゝちなる庭をよゝみてゝゝ比ゝゝゝ年

ゝゝゝの庭ゝを水ゝゝゝ蕾の蕾も

あゝんとゝ中ゝゝゝゝ半ゝ人のおゝて蕾

ちゝちゝを半ゝちゝふゝよゝ年下のる

ちゝちゝしゝをゝゝゝなのあちゝゝ

其十三　うゝを白の事

撞木やうちんの秋を立

ゝゝ川も芦ゝゝてゝるかを

吟ゝてちゝふ白ゝ　ちゝゝゝ　蕾ゝる

とあゝふゝの白たゝゝゝ蕾るのゝゝゝゝの

行蕾ゝきゝゝ蕾ゝいゝも一るをゝさゝんゝ

[illegible]

其十四　[illegible]於[illegible]の事

[illegible]

[illegible]

補　[illegible]

[illegible]蝶の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蝶の舞ふる　闇指

補　[illegible]　藤白

[illegible]

其十五　一句の自他の事

[illegible]川[illegible]細代[illegible]

[illegible]の[illegible]葉摘

[illegible]川[illegible]細代[illegible]

他と[illegible]葉[illegible]別[illegible]

川[illegible]　人[illegible]の[illegible]菜物と

[illegible]

あら海子海人の能こゝろ武

海人の能こゝろむい他ゝ　こゝの形い自ゝの
一ゝの自他あゝ

あゝ海子海人を見るゆの こゝ武

かゝなゝふけゝの一ゝの自自他あゝ
たゝゝゝふゝ

右為てひゝゝいかゝ一廣の角

志てひゝの禅の中ゝ墨の郷

他流ゝかゝるゝもゝゝ墨郷の
ゝゝふゝ人を感ゝもゝゝとゝふゝ
ゝふ自他のゝゝゝゝふゝ

補

きゝゝゝゝ猿志ひゝふゝ添乳ゝ郷

ある西ゝの絶妙集ふけるゝ玉ゝ
志ゝも宗西ゝ紙もゝ人のゝゝ
ゝよゝ女の自のゝゝふゝ論ゝ
男のゝゝふゝ添乳ゝこゝを他ゝ
ゝゝゝゝ猿志ひゝ自ゝ
自他ゝ人ゝゝゝ多ゝて人の師ゝ
みゝつゝゝゝ細翁曰一家の師ゝ
ゝゝゝゝゝゝ一ゝの理ゝも解
ゝゝゝ人の師ゝ形ゝゝふゝ人ゝ敬ゝ
己ゝゝゝゝゝの事ゝゝ
或曰初ゝの門人のみゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ紙ゝゝゝゝ門ゝ赤面ゝゝ
門ゝの稚吟ゝゝゝゝゝゝゝ
の婿ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

詞友ハ面従するもの多く術ある
事のよきかくの了簡ある時ハ師も手
差をとりしたる友ハ師ハそこのる事
疎きものと猿と申し差師友の
判を頼みとするを獨学固陋なり
よく心得へし

其十六　二人ハ感せしる句の事

縁縁の多き句ハ何も役に立ぬ哉
かゝれるハ縁の女の自乃るなり

縁語の善きし様の趣意に
かゝるへし縁より出してもよき句なし

の趣向をとりてハ案より紀後の句
風情をつらんとてもかゝふるハせゐ多
てとなりと縁の女の此化出しをもとんハ
むなしくん在

散ちと家々くそら耳も句時為　望一
盲人の光をみるへし

大根紙の間に恋ある萱の那　園女
女の常をもつ事し

仏舞火ついんきハ赤のる精進哉　落梧
長良川の吟するして長良川の事なり

行むかるこの人〻絃人このうふ
ゐをいひ出ていそく人歎きつきや
えてくる物をの罪つくることかえて
半るそさくらあそんむ爲〻

元りや家の濃の方佩ん　去来

還るくはるんらめさん方干　丶

秋風や白木の弓ふ張そらむ　丶

老民者と拾やさきん玉數　丶

見去来世のふ四月かふるのあ紀
みてよりあるものふのさ自なる
爲〻

簑虫の音を聞のよ暮を此の庵　翁

ちる毎に涙ふ濡ふ袖の露　丶

ふる簑竜ことを拾ん物程　丶

珍者の雪をおりの爲〻

ちる花を南無の法絶と久礼　守武

集〻末期の名ることを玉さの
其角曰唯一の神祇あ〻をいくの子
にくくるの爲ふ呉崇〻〻〻
烏呼とうちみとうふ半る爲〻

守武辞世

「あらしも又ゆく末も紗路山
岸の井川（この邊）
そむなきてと鳴を

㊜
宗祇法師二十五禁ぶのはしめにも
疑るの事　禁るの事
こそへてより此をさるの事
ともあるもの自他のことかりそめ
なるを以て生するもの也されは
国の自他のこと人倫のことし次
その外あるは獣まで対してもことことくを
のかふとそ
ことそれと　ことことき　嘆を　ちらと
挽え　ものを　まもて　ゆけ

形とあるを皆さらしあるの下知の
ことわる事也なるの心魂をのべ
のあらしくなり
追ひ出よかひ返るこの憶の色　翁
はやくさけ九月もちりし草の花、
これ一ふてえらふへし

㊜
禁句の事
兵庫の火の人なるは禁るなり
けるは到不到句くならぬもの終火
形く兵庫の火戦禁にあのくちある

ものなるべきもさいはひなる所の少の強りうつるとのべきこゝもるに
禁るなり

岩の火影人なるよ強りうつの
かゝあゝい禁ふるの証をのゝうん
ゝ人て八分ゝかゝるゝ皆禁るゝ
ゝ強をゝ禁ゝそゝるへゝ

補 不易流行の事

不易

行ゝなゝゝゝゝ禁を問ん全 其角

流行

堅なゝゝゝ不出ゝゝ強ゝの禁 ゝ

不易

杉のおゝの雪流ゝ雪の蛙 支考

流行

年ゝゝゝ強ゝ禁ゝゝ初時 ゝ

不易

清簾ゝゝ内ゝ百ゝ金の袷の裏 乙由

流行

[illegible]

不易　乙由

[illegible]山樵あるれきると　柳居

流行

梅ちるも仔枝を伝ふ折敷哉　丶

不易

卯の毎よ尺八さえて雪ふるを　烏酔

流行

大井川帖も七瀬の七夕ひ　丶

[illegible]

不易と流行の義考人
[illegible]人くを流行の内とする事
[illegible]

青全

[illegible]紫雲の山　貞室

[illegible]今朝の春　宗因

月[illegible]須磨の浦　貞徳

[illegible]人くを祖義より先の英傑[illegible]
流行をなすといへども各分[illegible]
不易のなるものは[illegible]

秋[illegible]と[illegible]掃く男[illegible]　友義

身を捨よの有る中あの高嶺霧　平砂

ここちつの人〻ふかよりの他流やと
聞つることとも多く不易の吟くもあると
夏やうしかくとや

鳥もなふあてての森や春の雨　長翠

世すすえの師匠の掬もあきなる　葛三

細道やけかくもなく椿さく　其堂

芹生あて芹田打くまの西　巣兆

瓜とまのよふねよりなる更衣　瓦雨

稗宮合ふけて出くり夕掬　雨塘

花を折る石いくくしかくとの　成美

霧ふくや朝の方〻岳の陽きえり　乙二

よふあまの瀑を見る馬ふ　恒丸

ふと時雨も秋ふる五月哉　完来

ふ事ふ見人の笠の春の金　岳輅

夏の丁ちけをきてをりをおる　青蘿

二日月浪のひとあハ形ののきて　羅城

鶏鳥のひやくとさく頃招い　士朗

警警とおとおつるあて底を　大江丸

夕さりの通ひ路ふかき雲　友國

朝ぼらけ田蓑の島の浮うき秋　瑞馬

秋ぞこの戸ゐ初とはるる木の葉ぶし　井眉

月ぞ見ぬ物やとしるる小田の屋　升六

青柳やよくも萌よ打ちさはし　月居

秋をうぐるむ雲の深さよ深る山　猿左

自こよひ流るる力松の水百里　梅年

蓮の花の抗ふはるや梅西の　土卯

多ひよりこそ秋の風山あるの月　定雅

鶯の巣の卵剥らんばかりなる　蒼虬

よ紅ゝゝ多く飯蔵る月おぼろ　其成

雲の山見ちるおぼろかゝひさる　丈左

猫の恋多ぬ形くるあるの　樗堂

そろそろや高ゝ書を見るん地　道彦

不易と流行と編あるこの流りを踏ふ
流りて編あるものの不易と
蛙ひあ　砂抗の逆風形のこゝ見る古抗の形風
流りち　俗者あるこの巣をんに抗さる函世の
俗者あるく不易あの流り

[illegible]

○

あの風をひのつらつ[illegible]んこの[illegible]のあわせ　誠拙禅師

角田川　[illegible]の吟[illegible]の恵然禅寺
[illegible]お見乃とよ世なるとあふ山る
の撰を志[illegible]ん[illegible]の暮尾
ふてこもてを[illegible]と[illegible]

俳諧寂栞巻之下　終

俳諧寂栞貞外

十五の哉の事

歌の部　かくこのちふみ[illegible]とけてさる板の部

[illegible]の部　別ふるあたり　ほくふぶ

[illegible]ひ[illegible]

紀貫の部　[illegible]の[illegible]月[illegible]部

野中の　[illegible]の[illegible]

秋美の哉　蓮　瓶の中なる清き水の
いろふも秋きぬ　あしたゆふ　かさしに
のたゝひしあるを

嘆息の哉　牛　呵る牛小時たつゆの色に
いろふ表葉をへて　秋のひの雨　紅葉
ろゝひ秋の

新ひの哉　黄葉　白きそのかの色ふかもに
おきそしてきくそゝ年もうれ時雨
あきこゝかの　なのゝこと秋のみとゆきゝ
もこの秋と時くく

ゝの秋きる友賀茂行よる後の月
かゝ秋しいつもそゝの秋よひゝ　むる秋
ゝろえあるゝ　ゝいゝ連もかもあと
いつゝ秋秋の秋ゝひゝ

ゝゝゝ哉　此比のみもゝるゝ稲　乃　秋
獲をつゝゝの雨ゝく作る世ゝゝゝ

ゝゝむ哉　ゝゝ結ゝ風の風ゝゝもなる紅野に
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝ哉　月清ゝ　今ゝ月ゝ沒も満るこの秋
ゝゝ秋ゝる友ゝゝ切ゝのをつゝひゝゝ

むらきぶれうる仏よりてかるも
みわ

ちらしの牙い行ゆゆ柳ふる武
うきをいかかを梅のひろい
そのみさはのと今して志ふ
たくひくかそふ
ふるみむぶ
ろぶさまぶ
さくてウスツヌフムユルウよりけく
れいはうきぶゆゆ思のぶいこれ
哥みもろ者のぶとうつみや先すう
てなのうく
えん葉せ

くれも友ふ紙おりぶ

ふくされしも自得の人ふ侍
はくうふくし
社堂日うき哉ゆても一るのみさゆ
よきいきうこうたる

言葉よりも動く
哥のはくふ

ふいあるを掛る巨雄ぶ
門のあよ小るゆるうる紙小春ぶ
うきのるきよあてきうきを
かふくよ貴きをよるるんたくし
武士のきくなるさんゆくふ
志屋ひ(し)舞人人ものれ
ゆえうくさむへきえと　舞あきく
もうゆのえふと

んみてきさきとるみをあらし

傘をもて頭を切るなり

初秋の遠里牛のあきの風

傘張の眠を胡情の瓦とる

遠里牛　眠を胡情とはくさとあり

一るのみさきをもて紙吟してもるべし

紙のやを拾るなり

紙の情をあそやとへんる渕瀬

叢の蟲ふむ者や烏この中

吟して志る人へ

たてものなり

梅柳暗夜女この郷

ぜしとらん字のあて井のひゆをふ銘を

かさすしふの

拙堂曰饒古録は古写本はあと添て

梅柳をうもの元と女共と生ちよ

梅柳をうの元と女よたとへきるをあて

をもと仮名をたてをたりけ

を延宝天和の吟あること

紫の一本ふ延宝天和の頃の風俗を

よくしてもるて其の時代の人ふ流を

ゆくて柳遊ふよ出るあとあれ衣裳

うらへ伊を生まるる形容をちり

出るるたりの途中あるふ達ひ

をもるるきも傘のけるを伊を衣裳

をもるる中くあるよ湯ふるる紙

てをとせしをあるんあとあふ木くの

柳をちりをうき宿中をうき宿

たゝこゝろしらし己に行を進するに我
をかけたりし人、若年にかへせるとしいへ
とらまうきを見るに大かた流行女も亦
流行をこのみて物見ん遊山をまれさへ
ふと出しまとまるゝかたに梅咲柳
みどりなりしかばつれて行き見んとや女
ふたの言流にて物見んまで出るなれんと
その世のさかさま今の世のさかさみとなる
きうら常なうし春日臺先生の独語
にも世の中の風俗のかはりたるをはな
さまで著しからねどその名聞利欲を
欲するものはいにしへ今もかはらぬ孫とも風俗
五十年も同じ流れにあらずして徂徠
先生論語徴の例に倣ひて延宝
天和の風俗をもてる見るあらはさるゝの
見えたるもこれさらに元禄の文字
作ることいつてみれば千百年の後十七字

ことわりのそれなん一字にかなへりおもの
まゝにてもかく明らかにこそ又曰に
阿をそれも一句の法にまよへるは哉とある
ありかたきものなれば博くいふるべからずを
饒舌録といへる書は俳句の玉緒といへる
発句のさまふたをあらはせし出版その
無き繊訥ならずにて不思和にあらむやし
出るなり俳句の玉緒を不用和の発者流
もあまた刻やゝつゞりて俳諧のとき
きこゆらんや

軽口の雅とかなへ人のことわり哉
寿ちよぞ瀬よらん康の志ひや
人のこゝろはもそ草の木そ獣ともそ

そのさまを身ようけてさて爰かし
まうる哉なの角他のうちうち ゆきさきを
安しよくならかまへし

三段の部　哀ちかき嘉をちかけば あはれに哉

吟して志る人しきくとかゝる句は一句
の始なるべし

名所の部
并や哉

首雷堀やみこの歯の山は月　安春

道灌や花さき世代はうし甚

名所のことをてや部をはるかすへくき
うまえハ人くいつれもあるうちうえ
好くしてつらふ愛に世るなし続るの
よくえのふところをありうきて出るの字

ふちらし紙のまふ句しらすも初心の好む
所なりとす

夕暮や秋を似ろしの難所

名所のや部自得の人をかけるもまなうち
解すると難ハ熱にすりして百生ハ人生
ちかくさるくあれと前をまつ句に
きてひとつの盡盧なる所に以ての
みやとうさうひて秋はの盡の字に
終のちらしをのきらえしし志祖餘
のおよ示しまれるらひ出せる人なしと
志るべし

首きの部

難を山鶏鳴くんて志るべき哉

十五の哉續るの題ゆえ志るまでし

拾遺むつ[illegible]の柳の下

[illegible]

五月みの[illegible]

[illegible]

時雨降

小傘[illegible]

時雨降[illegible]小傘さしはくくたる[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

高[illegible]

[illegible]

[illegible]

七夕のの詩を貴船の社にみそなはしてたてまつりし かりのふ歌のぶ
詩をのぶらふ貴船の社 これいたつまる
嘆息ぶ 稀有の歌 これいたつまる
あらず貴船はなはだめづらふ

稀有歌

ひとりなるも相思を為て枯れぬ
風根蔵のうらうらとはるぶ
たちつのたふ屋をのをきい挿ぶ
稀のて 稀のい ひとつ切る
稀といひたてろ 詞みさをる
てるをふかるもる 詞ゆ名りくつうま吟し
てたるあり

南天ふ幕さつのて吟て歌 光
雪吟ひ一人と見人と口るぶ
花ゆ禾ふ禾ふ禾ぶ
ふくの如くさきのて吟 ちくと別の
ぶりへいまちりとてそのはくをはし
とたむよのつのぶ そそ歌御ぶ
あつのやたうさぶしくく稀のトテハ
ぶこよりたくく旬くふのまし
ぶのて居て異命の弦の詩吟ぶ
稀ふ九光よ むくと紅海よすまぶ

かゝるのこゝよりなの雅たをいく
いつきいつゝいつてまとうさひ捨て
哉ふ留こを吟してきるあくし

なのるの卵を蔵〳〵野松の脇

なゝしらのあとをとゝ字てう書て
さてゝと留こをえこ

なの乃本の芝にもさらす白ひく

なとなひて若こもたゝとと結ひ
てゝと留こをし情稔ようこきの弘
別なこゝ吟してきるあくし

十五のやの乃事

影のや　うらひなや柳のしろ叢のお
影のやこゝ留ふてゝあふし　伊谷や
情稔やのさくひこ

治定のや　岡中やまこ留のうゝ乃中の陰
京中やいこのこやのたくへいひさめ
こるあり

祝賀のや　ぬきいろや大かこゝもの初り新
いつあも祝をくし

嘆息のや　かたくろひや歯ふ咎あて海苔の水

[illegible]

笠捨てみ菊めくるや初時雨

拙堂曰北枝ゐるあり祖義の菊を[illegible]て門ふ[illegible]
のるへきをり笠をさけて菊紙をくるる
やと嘆息しくるやの文字をしきりの
猫のやとくるるをくるまとくて古人の
みをるみても尚はの人乃吟あても
賞息称宮治宮まと程くそ
くりてくるくる

新のや　せみ蓮葉よ世をや伊勢の初夜

捨や　年の暮女の眼続さらすしや

かくのてくよふるあ系なふ五文字の紙
居るあ[illegible]ふ[illegible]きふさくろあり

花火黒い皆花もの子孫こや

これうさうひ捨るやなりよりよりるふ系
あきと皆[illegible]いふあるみてきくし

ことりと居て木の実ひくえ　さや

こを称うひ捨るやあり よりよりるふ系
あきと中七文字のみてるふ系あふ
みてきるふあ[illegible]

下総のや　水くさや蟬も鳴もぬるゝ海苔

吟じて志賀の浦

あづまのや　遠里の雪や業平や朝がほ

みぶしのものをみしあくてゐるもの

夜や秋や海へ捨るや降雪

見たくこのやうに似て寒くこのやうも

ゆくさきのと一るの治を吟じて

志賀人しむ初ゑとしておのゝ人

ゑをを

さちむや　ゆくゑ見きさ立やあくさの撫笠

ふるやけぬ　さちんや物のたくひかり

宮家々やみ家さの〳〵物より

おりをらさしもさんらのやあさと

志賀人し

口合のや　こゝ見や世の様ふ地ゐの古盒

吟じて志賀へ口合のや切るめゝ

ある方ゝかさゝねとけるい一様の治す

口合のやゝ切り也先るも出せてく

ものの見人合をて志賀人しうさこゐのや

口合のやよく似てこのゑるく

吟じて志賀人し

紙ひのや　人や来し　柳さ新く言乃歯

吟じて志るる事〜 ちやほる事やほる
のさくひ水りうらふさくれの二ゆう
あとゝゝのおもむきゝゝこうさくれる事
きちやきうく〜 やわやかく〜ん
若や末〜 なくのたくひふりう鋭
ふとこうる事〜

やーきうや 春あんや名あも水なお山の字を畏
吟じて志る事〜

たゝきのや 旅をこして人しやうき世の猿掛
吟じて志る事〜 さうむやとよく帰を
てのほう水ふ事

とや 〔ふとち家の周囲を人ゝゝやゝ〕ふる

腰のや 黄の蛇を小ゝそふく新や系せん数
繩のやよく治るゆうふきく〜やの字大神
よのゝ字まかゝ其中小後のやらいよく
をおかゝゝゝ新や新ゝと吟
〜て志るふ〜 拾ひやゝて後のや文字
あり多く後のやよあるゝ十五のや
後るを味ひてゝゝ体を志るく

やとりて 捨也ゝり 行事や祝ふ白数をかゝし事を
事の漸也雪川小見〜ふ昔あの
のゝも小ゝゝ志るをやとゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] エケセテ子ヘメエレとりようけ

[illegible]

雨の降るとそのをみりふ[illegible]

歳暮のものゝ妻[illegible]

[illegible]

[illegible]

行基菩薩近江の人とおもふ計ふ

近江の人とおもふ計ふ

近江の人とおもふ計ふ

と詠ずるなるべし

盃に泥赤蓮をむすびて

泥赤蓮をむすびて

泥赤蓮をむすびて

自得の人とぞ一句の法をあらはす

きるに切字はなくして切字をもつて

一るに切字はなくして切字をもつて

少もとりあつめ蕉門のあらひ

世紙袋に代る小用の切屑を

人に家を買せて高い年一忘

男計壹ふ高くして死ぬる秋の蟬

蟬をむすうさうふ峰 桂

拙堂居士或屑に十文字の接枝の切屑

出るの乾あふ一るの乾あふ也

詳六日世十八字にもて皆切字ふ

[illegible]

初茎葉[illegible]

君火[illegible]

[illegible]

[illegible]

文化九年壬申皐月刻成

江戸書賈

本石町十軒店
英大助

浅草茅町二町目
須原屋伊八